

## ベンサム『教育改革論』としての『クレストマチア』論

西尾孝司

## 目次

- 一 はじめに
- 二 『クレストマチア』の成立——その書誌学的考察
- 三 教育改革論としての『クレストマチア』
- 四 『クレストマチア』の基本的な教育理念
- 五 「クレストマチック・スクール」のカリキュラム
- 六 「クレストマチック・スクール」の学校運営原理
- 七 啓蒙主義から教育主義へ——むすびにかえて——

## 一 はじめに

ヨーロッパ政治思想史上においては、十八世紀は《啓蒙の世紀》といわれている。十八世紀ヨーロッパの思想界においては、多くの啓蒙主義の哲学者たちが輩出する。それでは、《啓蒙》(enlightenment)とは、どのように定義されるのであろうか。啓蒙主義とは、人間の理性的存在への完成可能性とその努力の大切さを強調しようとする広義の教

育論であるといえる。それは、中世的な宿命論を拒否するものであり、人智による可能性を強調しようとする思想である。それは、キリスト教における人間の原罪性を否定しつつ、人間の現世的な幸福追求を積極的に肯定しようとする思想である。

こうして、啓蒙主義は、中世的な神学的宿命論を完全に否定し去った無神論的な功利主義においてその成熟的な完成をみたといえるのである。

啓蒙の世紀は、神と自然に対する《人工》(art)の可能性を発見した世紀でもある。<sup>(1)</sup>啓蒙にとって神は、人間を重く暗い隷従の軛に緊縛しようとするものであった。啓蒙にとって自然とは、人間の無知蒙昧と野蛮と無法であった。啓蒙主義は、人間を神への隷従から解放しようとしたところに成立する。そして、啓蒙主義は、人間を無知蒙昧から解放し、各人が各人の幸福を積極的に実現しようする理性としての計算能力への完成可能性を督励しようとするところに成立をみたのである。

啓蒙主義は、人間的諸能力の可能性を解放しようという信念にもとづいて、これを《人工》としての《教育》によって達成しようという教育論的オプチズムであった。したがって、啓蒙主義が教育論として自己を更に具体的に展開してゆくのは、必然的な過程であったといえる。ジョン・ロックは、一六九三年に、『教育に関する考察』を公刊した。ルソーは、一七六二年に、『エミール』を公刊した。その内容においても教育方法論においても、この両者は著しい対照を示してはいるものの、人間的諸能力への明るい完成可能性への展望がその人間論的前提とされている限りにおいて、『啓蒙の世紀』の象徴的な教育論的著作であったといえるべきであろう。さらには、いわゆる観念連合の心理学説も、また、その機械論的教育論というオプチズムにもかかわらず、人間完成論としての教育論的展開にはかならなかつたのである。

ベンサム『クレストマチア』は、かれの教育論にかかわる唯一の論著である。同著は、教育論であるというよりも、むしろカリキュラム論ともいべき構成となっている。それは、きわめて具体的で実際的な教育課程論として構想され、即時的に実現可能な教育課程論として展開されている。

それでは、ベンサムには教育原理論的な論著はないのであろうか。エルベシウスの強い影響を受けたベンサムにおいては、教育論は立法論として展開されたのであり、かれの立法論に関する膨大な論著はその根底においては教育論として展開されたというも過言ではない。<sup>(2)</sup>かれにとって教育原理とは、立法の原理にはかならなかったのである。それは、教育「環境説」に由来する。教育「環境説」によれば、人の性格や能力はその育った環境の良否によって決定される。したがって、ここでは、教育論は立法論へと置き換えられるのである。良い環境をつくるための良き立法こそ人間の性格と能力を決定する究極的な装置であると考えられたのである。

ベンサムは、じつに、立法論を展開しつつ、教育論を展開しようとしたのである。したがって、かれに残されていた教育論は教育課程論としてのそののみであったといえよう。かれは、これを、『クレストマチア』によって具体的に展開したのである。

「クレストマチア」とは、二つのギリシャ語からつくられたかれの造語であり、『役に立つ学問に資する』という意味をもつ。それは、のちに詳しくみるように、宗教教育を否定し、古典古代のギリシャやローマの学芸に重点をおいた従来の学習内容を転換して、徹底した《実学》の学習を中心とした教育課程論となっている。それは、究極的には、ラジカルな教育改革論として展開されている。こうしてネズビットは、「ベンサムのクレストマチアは近代の発見である<sup>(3)</sup>」と位置づけたのである。

一八〇八年以降、ベンサムの周辺に結集してきたグループは「哲学的急進派<sup>(4)</sup>」と呼ばれている。哲学的急進派は、

教育改革にも非常に大きな情熱をもっていた。そのようなかれらの教育改革論の理論的な枠組を提供したものが、ベンサム『クレストマチア』にはかならない。加えて、かれらは、更に、学校設立運動を具体的に展開したのである。かれらの学校設立動には、主として、二つの運動があった。<sup>(5)</sup> その一つは、“Chrestomathic School”の設立運動であり、これは失敗に終わった。もう一つは、“University College”の設立運動である。これは首尾よく成功して、一八二八年に開校した。このように、哲学的急進派は、ベンサムの教育改革論を具体的な学校設立運動として展開しつつ、その具現化に取り組んだのである。

#### 注

- (1) 拙著『増訂 イギリス功利主義の政治思想』（一九八一年）、三七頁。
- (2) 同前、二六頁。
- (3) Nesbitt, G. L., *Benthamite Reviewing: The First Twelve Years of The Westminster Review, 1824-1836*, 1934, rep. 1966, p. 79.
- (4) 拙著『ジェレミ・ベンサムの政治思想』（一九八七年）、一三九—四一頁。
- (5) 拙著『増訂 イギリス功利主義の政治思想』、前出、四三頁。

### 二 『クレストマチア』の成立——その書誌学的考察

ベンサム『クレストマチア』は、一八一五年に印刷され、親しい友人たちに贈呈された。しかし、それは、公刊されたものではなかった。一八一六年に、『クレストマチア』（第一部）が公刊された。翌一七七年に、その「第二部」が印刷され、「第一部」を購入した読者に配付された。一七年の『クレストマチア』の書名には、「第二部」という表示

はあるが、一六年に公刊された『クレストマチア』の書名には「第一部」という表示はない。したがって、一六年公刊の同書を「第一部」と呼ぶのは、あくまでもその「第二部」との関連における便宜上のことにすぎないというべきであろう。

一八一七年に、「第一部」と「第二部」が合体された一冊の書物として、『クレストマチア』ははじめて公刊された。これは、一九九四年に、ジェフリ・スターン編によって、“*Chrestomathia And Chrestomathia, Part II*”として復刻された<sup>(1)</sup>。

一八一七年は、ベンサムの思想的生涯にとつて特筆大書されるべき年である。それは、かれが『議会改革計画論』<sup>(2)</sup>を公刊した年であったからである。同書は、かれが『代表制民主主義』を主張する政治的急進主義の立場を明確に表明したものである<sup>(3)</sup>。また、この時代は、ベンサムの周辺に哲学的急進派が形成をみた時期とも重ね合わさる。したがって、『クレストマチア』は、ベンサムがすでに急進主義者へと転換した後、執筆され公刊されたものである。同書は、のちに詳述するように、かれの『急進的な教育改革論』の主張にほかならなかったのである。

その後、『クレストマチア』は、ジョン・パウリング編『ベンサム全集』第八巻に収録されて、一八四一年と四三年に公刊された<sup>(4)</sup>。『全集』第八巻への収録に際しては、トーマス・サウスウッド・スミスがその編集に当たり、「編者による序文」(*Introduction by the Editor*)を寄せている。なお、パウリング版『全集』第八巻においては、『クレストマチア』は、「第一部」と「第二部」との区別は全くなされておらず、完全に一体のものとして編集されている。これは、一九八三年に公刊された“*The Collected Works of Jeremy Bentham*”<sup>(5)</sup>においても同様である。また、一八四一年と四三年のパウリング版『全集』の間には、『クレストマチア』の冒頭に付せられている「クレストマチック・インストラクション・テーブルズ」(*Chrestomathic Instruction Tables, Table I*)に若干の異同がみられるだけで

ある。<sup>(6)</sup>

一九八三年に、「コレクテッド・ワークス」の一卷として『クレストマチア』が公刊された。同書には、二人の編者による詳細な「編集者序文」と膨大な脚注が付せられており、読者の理解に資するところが大きい。

ベンサム『クレストマチア』には、現在のところ、大別して、三種類の版があることになる。ここでは、便宜上、スターン編によって復刻された『クレストマチア』を「初版」と呼び、パウリング編『ベンサム全集』（第八巻）に収録されたものを「パウリング版」と呼び、さらには、『コレクテッド・ワークス』の一卷としてM・J・スミス/W・H・バーストンによって編集されたものを「コレクテッド・ワークス版」と呼ぶことにしたい。以下、これらの三つの版の間にみられる重要と思われる異同について少しくふれてみたい。

まず、第一に、パウリング版とコレクテッド・ワークス版の間にみられる異同は、二点にすぎないことが注目されるべきであろう。その一点は、「テーブルI・II・III・IV・V」の扱い方が違っているところにある。前者では、「テーブルI・II・III・IV・V」はそれぞれ一枚ずつの中折込図表として、それぞれ独立した形で、八頁と九頁、四四頁と四五頁、七四頁と七五頁、一一〇頁と一一二頁、八二頁と八三頁の間に挿入されている。なお、「テーブルIV」と「同V」は、その順序が逆となっている。これに対して、後者では、「テーブルI・II」が一枚の中折込図表の表裏をなす形で、一八頁と一九頁の間に、「テーブルIII・IV」が同じく一五八頁と一五九頁の間に挿入されている。「テーブルV」は、一七八頁と一七九頁の間に挿入されている。その二点は、パウリング版では、“Appendix—NO. V.”における“Section XII”が二重となっているところにある。<sup>(7)</sup>しかし、これは、編集上の単純なケアレス・ミスティックといふべきものである。コレクテッド・ワークス版では、これは訂正され、それに伴い、それ以降の“Section”が一つずつ繰り下がっている。

第二に、初版とパウリング版の間の異同については、ここでは、後者にはその直接の編集に当たったT・S・スミスの「編者による序文」が追補されている点のみを指摘するにとどめたい。

第三に、初版とコレクテッド・ワークス版の異同については、重要と考えられるものとしては、次の三点をあげるべきであろう。その一点は、前者には後者の一九頁から五六頁までが欠落していることが指摘できる。これは、クレストマチア方式による教育方法の利点を論じつつ、これに対して予想される反対論に反論したものであり、『クレストマチア』の中でも非常に重要な位置を占める部分である。その二点は、前者での“Appendix II.”が後者では削除されており、後者での“Appendix II.”は前者のIIIとなっており、これに伴い、“Appendix”のナンバーが後者では一つずつ繰り上がっていることが指摘できる。なお、初版の“Appendix II.”は二頁足らずの短いものである。その三点は、前者には全く欠落している“Appendix V—IX.”が後者では追補されている点である(CW, pp. 276-407)。これは、質量ともに非常に重要な違いである。

初版とコレクテッド・ワークス版の間にみられる異同は、以上に指摘した三点以外には、十箇所が挙げられる。それらのうちの五箇所は、「テーブルI・II・III・IV・V」に関するものである。初版では、「テーブル」は、中折込図表という形をとっておらず、いずれも見開き二頁をとって直接本文中に印刷されている。すなわち、「テーブルI」は初版本文の冒頭に、「同II」は初版本文六八頁につづいて見開き二頁で印刷された上で、その解説という形で、独自の二四頁分が設けられている。これは、製本上ではきわめて異例のものであるというべきである。なお、この部分は、コレクテッド・ワークス版では本文として扱われている。初版では「テーブルIII・IV・V」は、それぞれ見開き二頁を用いてその巻末に一括して印刷されている。

初版とコレクテッド・ワークス版の間にみられるその他五箇所の異同は、『クレストマチア』全体の主旨に及ぼす

ような格別の意味はないものと考えられるものである。したがって、本稿ではこれら五箇所の異同についてはその存在を指摘するにとどめておきたい。

## 注

- (1) Stern, J. (ed.), *Chrestomathia And Chrestomathia, Part II*, 1994.
- (2) Bentham, J., *Plan of Parliamentary Reform*, 1817.
- (3) 拙著『ジェレミ・ベンサムの政治思想』前出、一五九頁以下参照。
- (4) Bentham, J., *The Works of Jeremy Bentham*, ed. by John Bowring, vol. 8, 1841 & 1843.
- (5) Bentham, J., *Chrestomathia, The Collected Works of Jeremy Bentham*, ed. by Smith, M. J. & W. H. Burston, 1983. 以下、本稿は「コレクテッド・ワークス」(以下、CW.と略記する)による。なお、ベンサムの著作解題目録としては、次の文献がある。  
2 Chuo University Library (ed.), *A Bibliographical Catalogue of the Works of Jeremy Bentham*, 1989.
- (6) *Chrestomathia, CW., Editorial Introduction*, pp. xxiii-iv.
- (7) See, *Bowring's ed.*, vol. 8, pp. 138-142.

### 三 教育改革論としての『クレストマチア』

ベンサム『クレストマチア』の最大の意義は、それがかれの教育改革論として展開されているところにあるといふべきであろう。かれは、『クレストマチア』を、十九世紀初頭のイギリスにおける教育制度の根柢的な改革論として書いたのである。それまでの、かつ、それ以降のベンサムのさまざまな分野における諸論者は、すべて、それらの当該分野における《改革論》として書かれたものであったというも過言ではない。かれは、『クレストマチア』を、強烈なる教育改革論として構想し、これを書いたといえるのである。



それでは、教育改革論としての『クレストマチア』には、どのような改革論が展開されているのであろうか。同書で展開されているベンサムの教育改革論の主要なものを、次の八点にしぼり、その意義について論究してみたい。

その第一点は、教育の機会の特権から解放しようとする企図にもとづく改革論であったところにある。この時代において、いわゆる義務教育が存在しなかったことはいまでもない。逆に、この時代はいわゆる産業革命の進行の下に、過酷な幼児労働が激増しつつあった時代である。この時代は、一〇歳未満の子供たちが過酷な労働に酷使されていた。このような幼児労働が禁止されたのは、一八一九年に制定された「工場法」によってであった。この工場法は、九歳未満の幼児労働を禁止し、一六歳未満の子供の一日の労働時間を一二時間以内に制限した。また、一八三三年の「工場法」は、一三歳未満の子供の労働時間を一日九時間以内に制限した。

一八七〇年に制定された「イングランドおよびウェールズにおける初等公教育を提供する法律」(An Act to provide for Public Elementary Education in England and Wales)は、五歳から一三歳までの児童を対象にした初等教育を定め、宗派的支配によらない公教育を目ざした。また、同法は、七六年の「初等教育法」によって就学義務が強化され、九一年の「無償教育法」によって義務教育の無償化への途が開かれる。その完全な無償化は、一九一八年に実現をみる<sup>(1)</sup>。

十九世紀以前のイギリスにおいては、教育は上流階級の《特権》であった。この時代の上流階級は、その子弟を、いわゆるパブリック・スクールからオックスフォード大学やケンブリッジ大学に進学させて、特権的な教育の機会を独占していた。十九世紀以前のイギリスにおいては、教育は《特権階級》の独占物にはかならなかったのである。

ベンサム『クレストマチア』は、そのような特権階級による教育の独占に対する強烈な抗議の書であったといえる。ベンサムによれば、教育は、特権階級の独占物であってはならず、多くの人々に開かれるべきものである。かれ

は、そのような教育的理想の実現を目ざして、『クレストマチア』を書いたのである。それは、ミドル・クラスによる主体的にして、かつ、独自の教育制度の必要性を強調しようとするものであった。

その第二点は、「クレストマチック・スクール」(Chrestomathic school)は、従来の教育方法とは全く異なる新しい教育理念にもとづいた初等教育の構想として立案されたところにある。ベンサムによれば、この学校に入学する年齢は七歳からであり、十四歳にしてそのすべてのカリキュラムを修了する<sup>(2)</sup>。十四歳で修了する根拠は、十四歳が当時のいわゆる年期奉公に出る年齢だったところにある( *ibid.*, pp. 26, 125.)。この学校を卒業した上で、少年と少女たちは、年期奉公に出るか、更に上級の高等教育機関に進学することになる( *ibid.*, p. 122.)。ベンサムは、この学校は、基本的には《男女平等》であるとしている。それは、いわゆる《男女共学》である。かれは、この学校は、「両性にとって有益であり、いくつかの教科は男子にとってよりも女子にとって有益である」( *ibid.*, p. 122.)と述べている。かれは、このような学校は、各々、一、〇〇〇人の生徒を修学させうる規模が適当であると考えていた( *ibid.*, p. 123.)。そして、それに要する建築費は五、〇〇〇ポンドが必要であるとしている( *ibid.*, p. 123.)。かつ、その校地は半径約二マイルの円形の土地に( *ibid.*, p. 125.)、その建築構造は円形をしたいわゆるパノプチコン様式の校舎を建築すべきことが構想されているのである( *ibid.*, p. 104.)。

その第三点は、いわゆる「助教師制」(monitorial system)の採用が提案されているところにある。クレストマチック・スクールは、上流階級の子弟の従来のエリート教育とは根本的に違って、教育の大衆化を目ざそうとするものであり、多人数教育を目的としている。今日風にいえば、それは、いわゆるマスプロ教育にほかならない。当然に、それには、多くの教員を必要とする。しかし、それに従事する教員をどのようにして養成するかという課題に加え、教員の人件費をだれが負担するのかという課題が不可避となるであろう。そこで、ベンサムは、第一ステージか

ら第五ステージまでの教育課程の各段階で、学習の習熟度が進んでいる生徒がその習熟度が遅れているクラス・メイッスを正規の教師にかわって教える方式としての「助教師制」を考案したのである。これは、かれのオリジナルの着想ではなく、ヨゼフ・ランカスターがすでに実用化していた教育方法であった。<sup>(3)</sup>ランカスター方式による教育方法とは、「生徒全員に対して同時に同じ教育を施すのではなく、いくつかの目的別に小人数に編成して教育を施こそうとする教育方法である」(ibid., p. 37)。したがって、クラスは生徒の学習の習熟度別に編成される(ibid., p. 110)。

ランカスター教育法は、従来の教育法とは全く異なる新しい教育システムであって、「これは生徒を教師として活用する方式」(ibid., p. 43)である。それは、「より進んだ生徒ないしはより高い習熟度をもった生徒たちが、かれらの仕事として、低学年の生徒ないしは学習において遅れている生徒を教育したり援助したりするために採用される方式」(ibid., p. 136)である。この方式は、生徒の学力に見合った形での教育を実施できるという利点をもつ。これに対して、従来の教育方法は、予め決められた課程を、生徒各人の学力に関係なく画一的に恐怖と強迫によって強制しようとするものでしかなかった(ibid., p. 43. See, ibid., pp. 136-8)。従来の教育方法は、「[い]つして上級生も下級生も、ともに、傷つけられていた」(ibid., p. 137)のである。

ベンサムによれば、このような助教師制は、次の四つの利点をもつ(ibid., pp. 102-3)。

- ① 金銭上の節約になる。この制度では、教師をつとめる生徒には報酬は支給されない。
- ② 時間上の節約になる。教師をつとめる生徒たちによって一斉に授業を開始できるからである。
- ③ いくつかの能力の伸長に役立つ。例えば、教師をつとめる生徒は注意力が増加するし、一般の生徒たちは正規の教師に対するよりも従順となる。
- ④ 他の生徒に教えることによって、同時に、その生徒が自分自身を教育することになる。「すべての教師は、ま

ず、学習者たらねばならぬ」(ibid., p. 148.) からである。

このような助教師制に対して、「それは実現不可能であり、仮に実施されたとしてもその成功は不可能である」とする反対論が予想されるとしつつ、ベンサムは、次のように反駁している。「このような教育制度が、最も完全な成功のもとに、最も困難な目的にも適用可能であることは、経験によって疑う余地のないものとなっている」(ibid., p. 38.)。これは、かれがランカスター方式の教育方法が「議論の余地のない成功」(ibid., p. 37.) をおさめていると考えたことを示すものでもある。かれは、このような助教師制を実現困難であると批判する人を「軽率な人」(ibid., p. 37.) であると反批判している。

ここで、あえて福沢諭吉に付言するならば、福沢は『福翁自伝』において緒方塾の塾風にふれつつ、「先進生が後進生に講釈もして聞かせ不審も聞いてやり、至極深切にして兄弟のよう<sup>(4)</sup>にある」と回想している。但し、緒方塾とベンスムの「クレストマチック・スクール」は、その規模が全く違っており、後者のそれは最大で一、〇〇〇人規模の生徒数を擁する学校として想定されている点が留意されなければならない。

その第四点は、「クレストマチック・スクール」のカリキュラムが《実学》中心に編成されているところにある。「クレストマチア」とは、「役に立つ学問に資する (conductive to useful learning)」(ibid., p. 19.) という意味の二つのギリシャ語からかれ自身が造語したものである。その具体的なカリキュラムは、第五節において詳しく紹介したい。かれの《実学教育》は、旧来のエリート教育の全く実用性を失った伝統的なカリキュラムを根本的に改革しなければならぬとする視点からのカリキュラム改革論として成立したものである。それは、すでに死語となってしまうギリシャ語やラテン語を中心としたカリキュラムの改革論にはかならない。実社会で全く役立たず、実社会に出て二〜三年もすれば忘れ去ってしまうようなギリシャ語教育やラテン語教育は必要ない (ibid., p. 43.)。

この点に関して、ベンサムは、「古典的学問や古典的芸能を無視するものである」(*ibid.*, p. 38.) とする反対論を予想して、次のように反駁する。クレストマチック・スクールでの六・七年間の教育課程において、ギリシャ語やラテン語に熟達することは困難であるとしても、ギリシャ語やラテン語を全く教えないということではない。たとえ死語ではあってもその心得がある者にとっては、楽しく人生をおくるための手段となったり、余暇のすごし方として無害で安価な楽しみをもたらしてくれるはずである。そして、もし新しい教育方法でギリシャ語やラテン語の教育が実施されるならば、その教育効果は旧来の教育方法よりも高いはずである (*ibid.*, pp. 38-9.)。

以上のようなベンサムの実学中心のカリキュラムは、当時のミドル・クラスの両親たちの切実な教育的要求を反映するものであったといえる。かれらが求めていたものは、日本的に表現するならば、まさに、「読み・書き・そろばん」であったといえるのである。

その第五点は、「クレストマチック・スクール」では宗教教育が一切否定されているところにある。ベンサムは、新しい教育方法におけるカリキュラムには宗教は含まれるべきではないことを強調している (*ibid.*, p. 89.)。これは、もちろん、無神論を積極的に教育しようとするものではないが、教育における宗教的中立性を強調しようとするものであった。かれは、①「無宗教による教育の必要性」、②「宗教教育の不必要性」、③「宗教を教育から除外してもなんらの問題もない」とする三つの視点から無宗教による教育の正当性を論証しようとしている (*ibid.*, pp. 89-90.)。

まず、①「無宗教による教育の必要性」については、かれは、次のように主張する。「かれらの両親たちはこのようなクレストマチック・スクールに子供たちを進学させたいと望んでいるにもかかわらず、宗教を口実に、子供たちのある部分を排除しようとするのは、それがどの程度の人数になるかは確定できないが、膨大な子供たちをそのような学校教育から排除することになるであろう」(*ibid.*, p. 90.)。これは、特定宗教を口実として、子供たちからその

教育を受ける機会を奪ってはならないことを強調しようとしたものである。例えば、同スクールがある宗派を奉じている場合には、それ以外の宗派の子供たちの入学の機会を排除することになり、結果的には多くの子供たちからその教育を受ける機会を奪ってしまうであろう。ベンサムは、同スクールが安い学費で運営されることが多くの子供たちにその教育の機会を広く開放する途につながると考えていた。これを逆にいえば、同スクールに多くの子供達たちが入学することによって、はじめて安い学費での学校経営が可能となるといえる。ところが、特定宗派を奉じた場合には、そのような学校への入学者は制限されざるをえず、その経営は結果的には高い学費にたよらざるをえなくなるであろう。かれは、多くの子供たちにその教育を受ける機会を開放するためには、学校教育は無宗教に徹することが必要であることを強調しているのである。また、かれは、宗教を排除した場合にはむしろ生徒数が減るのではないかという懸念に対しては、「宗教を除外したとしても、この新しい教育制度の下で、その生徒数が減少するであろうとする合理的な根拠はない」(ibid., p. 91.) と述べている。

次に、②「宗教教育の必要性」については、かれは、次のように主張する。「ナショナル・ソサエティ<sup>(5)</sup>が子供たちが最も必要としている学問を教える初等教育の学校を設立するに際して、キリスト教的宗教一般、および、特にそのイギリス国教会形式をカリキュラムに採用すべきであることを決定したけれども、これについては次のように断言せざるをえない。すなわち、少なからずの子供たちに対して、それらの学校において宗教が国教会形式において教えられることがなかったとするならば、どのような形においても、その結果は宗教がかれらに教えられることもなかったであろうし、かれらによって学習されることもなかったであろう」(ibid., p. 90.)。ここでは、かれは、学校教育に宗教教育が不可欠に必要である論拠は薄弱であり、それは公権力によって上から強制されているものであるにすぎないことを強調しているのである。かれによれば、子供の両親たちにとっては「宗教は無関心の一事にすぎない」

(*ibid.*, p. 91.) のであり、学校教育において殊更に宗教に拘泥する必要性はない。さらには、かれは、音楽、舞踏、自然哲学、化学、フランス文学、イタリア文学を担当するそれぞれの教員は、その授業において宗教にふれた授業内容を避けるべきである、と主張するのである。

最後に、③「宗教を教育から除外してもなんらの問題もない」については、かれは、「宗教は、イギリス国教会形式のみならず、あらゆる形式において、きわめて危険なものである」(*ibid.*, p. 93.) と述べて、無宗教による教育にはなんらの問題もおこりえないと主張しているのである。

ベンサムの以上にみた無宗教を標榜する学校教育論は、子供たちの教育をうける機会均等を拡大しようとすることを主眼としつつも、宗教教育によって子供たちが受ける教育上の利点は全くないとする視点から主張された従来の教育制度に対する根柢的な改革論であった。それは、十九世紀から二〇世紀の各国において確立をみる公教育における宗教的中立性の理論を先駆的に準備するものであったといえるのである。

その第六点は、「クレストマチック・スクール」では、一切の体罰が厳禁されているところにある。ここで体罰とは具体的には「ムチ打ち」であるが、同スクールではムチ打ちは厳禁される。この時代のパブリック・スクールではムチ打ちはごく普通の一般的な体罰として使われており、非行に対してのみならず、学習の進度が遅れた生徒に対しても加えられていた。これに対して、ベンサムは、クレストマチック・スクールは、「懲罰の最少限化原理」(*ibid.*, p. 105.) にもとづいて運営されねばならないと考えており、仮に生徒を処罰する場合でも肉体的な苦痛を伴うものであってはならないと主張している (*ibid.*, p. 35.)。同スクールでは、「体罰が禁止され、体罰がなくなるので、教師たちは残酷であるとか不法行為を働いているとかの非難を免れる」(*ibid.*, p. 34.) のである。

その第七点は、「クレストマチック・スクール」は、同スクールへの賛同者と同スクールへその子女を入学させた

いと望む両親からの《醗金》を基金として設立され、公金からの援助は一切期待されていないところにある。この醗金に応募しない両親の子供は原則として同スクールに入学できないが、その醗金への応募の有無にかかわらず一定期間に限り入学を許される (*ibid.*, p. 129)。これは、今日の日本に例えるならば、完全な私立学校として設立され、かつ、その後も全き自立的な財政において運営されてゆくことを意味する。ベンサムによれば、その設立時の醗金は「一株一〇ポンド」として、一人が何株でも応募でき、その一株について年率5%の利子を支払わなければならない (*ibid.*, pp. 128-9)。この当時のイギリスの一〇ポンドは、現在の日本円に換算すると約二〇万円であり、これは決して安い醗金であるとはいえない。この他に、学用品費として年四〜八ポンドが必要である。なお、同スクールは、人件費を含む学校経営に必要な経費を支払った後に余剰金が出た場合には、これを政府発行の有価証券に投資する (*ibid.*, p. 129)。

同スクールは、醗金への応募者に対して、生徒数が一五人以下にならない限り開校後三年間は廃止しないという保証を与えなければならず、かつ、その旨をロンドンの日刊紙に公告しなければならぬ。また、同スクールは、毎年、その会計報告をロンドンの日刊紙に掲載しなければならぬ (*ibid.*, p. 130)。これは、晩年のベンサムの『憲法典』における《パブリシティ》論として開花結実をみる萌芽形態であったといえる。<sup>(6)</sup>

その第八点は、ベンサムの「クレストマチック・スクール」は、教育の機会を一般庶民にも開放しようとする強烈な改革意識に加えて、教育制度の《エコノミー》の追求というかれのライフ・ワークの一環として構想されたところにある。かれの教育制度における《エコノミー》には、生徒の両親たちからみての安い学費という視点と学校経営それ自体が安上がりでなければならないという視点があつた。もちろん、この二つの視点は、表裏一体をなす関係にある。しかし、ベンサムは、安い学費を大前提とした上で、その安い学費でその経営が成り立ちうるような合理的な機



械論的な学校経営論を構築しようとしていたといえるのである。

ベンサムによれば、「クレストマチック・スクール」は、《その利益が最大化され、その負担が最少限化される》という原則で運営されなければならない (*ibid.*, p. 55.)。これを実現しうるための方策として、かれは、すでにみたように、まず、多人数教育を構想した。少数のエリート教育では、そのための学校経営のための費用という視点からすれば、生徒一人当りの授業料は非常に高いものとならざるをえないであろう。教師一人当りの生徒数が多くなればなるほど、その授業料は安くなる。そして、かれは、生徒数の増大に比例して教員数が増加しないような制度として、すでにみたような「助教師制」を構想したのであった (*ibid.*, p. 102.)。

さらには、かれは、クレストマチック・スクールの設立とその運営経費はすべて私的な醸金によってなされるべきであるとしている。これは、同スクールのために一切の公金の支出が期待されていないことを意味するだけではない。それは、同スクールが自らを合理化して安上がりの学校経営態勢を確立しなければならないことをも意味する。ベンサムは、そのために、「褒賞を多用しない原理」 (*ibid.*, p. 105.) を学校運営原理の一つとして確立すべきであることを主張している。かれの安上がりの学校改革論としての「クレストマチック・スクール」は、安上がりの監獄改革論としての「パノプチコン」と全く同様の着想にもとづくものであったといえる。<sup>(7)</sup> 前者は利用者の醸金が求められる点で後者とは異なり、後者はその土地と建物が政府の出費による点で前者とは異なっている。しかし、その両者に共通する運営システムは、外部から一切の援助を受けることのない、完全に自律した機械論的な体系として構想されているのである。

以上に考察してきたベンサムの「クレストマチック・スクール」の主要な特徴を構成している八点にわたる教育改革論的視点は、いずれも、当時のイギリスの教育制度に対する根柢的な批判を含むものであり、それらは旧来の教育

制度の徹底した改革論として主張されたものであった。ベンサム『クレストマチア』が、教育改革論として展開された所以がここにある。

## 注

- (1) 江藤恭二・木下法也・渡辺晶編『西洋近代教育史』（一九七九年）、一八六―七頁。
- (2) *Chrestomathia*, CW, pp. 125-6. 以下、『クレストマチア』からの引用頁は、本文中に表記する。
- (3) *Editorial Introduction*, CW, p. xi.
- (4) 福沢諭吉『福翁自伝』（一八九九年。岩波文庫版、一九七八年）、八四頁。
- (5) これは、一八一一年に設立された。その正式名称は、次のようなものである (*ibid.*, p. 90n.)。The National Society for the Education of the Poor in the Principles of the Established Church, the Anglican counterpart of the Nonconformist British and Foreign School Society.
- (6) 拙著『ベンサム『憲法典』の構想』（一九九四年）、三〇四頁以下参照。
- (7) 拙著『増訂 イギリス功利主義の政治思想』、前出、一五三頁以下参照。

#### 四 『クレストマチア』の基本的な教育理念

「直接的であれ間接的であれ、幸福は、どのような形であっても、あらゆる思考の主題であり、あらゆる行為の目的である（強調―原著）」(*ibid.*, p. 179.)。

ベンサムの功利主義は、禁欲主義を否定して、人生における最高の目的として各人の幸福追求を倫理的に正しいものとしてこれを是認しようとするところに成立をみた。かれは、『クレストマチア』においては、幸福を実現するための総合的な学問として『ユーディーモニックス』(*Eudemonics*) という言葉をギリシヤ語から造語している。「ユ

「ユーディーモニックスは、あらゆる分野の芸術の目的であり、あらゆる科学の主題である」(ibid., p. 179)。すなわち、「ユーディーモニックスとは、幸福の技巧である」(ibid., p. 181)。

『クレストマチア』においては、ベンサムは、『幸福の技巧』論を本格的に展開しているわけではない。しかし、かれが同書において、あえて『幸福の技巧』としての『ユーディーモニックス』という用語を造語したのは、かれの教育改革論がその一部門を構成していることを確認しようとするところにあったといえるように思われるのである。

その大前提には、人は教育を受けなければ幸福にはなりえない、とする観念があったといえる。教育によって人は幸福をよりよく実現しうる手段を得ることができるのである。しかしながら、ベンサムによれば、従来の教育制度と教育内容とは、人はその幸福を実現しうるための手段を得ることはできない。そこには、二つの大きな転換が求められているのである。その一つには、教育内容が「役に立つ学問に資する」内容に転換されなければならない。これは、次節でみるようなカリキュラムの改革論として展開される。もう一つには、教育を少数のエリートから開放して、多くの人々がその機会を享受できるように新しい学校制度の創造が求められている。そのためには、すでに、前節でみた「助教師制」を含む多人数教育を可能としうる新しい教育システムが創造されなければならないのである。

ベンサム『クレストマチア』の冒頭においては、まず、そのような新しい学校教育制度としての「クレストマチック・スクール」のさまざまな利点が列挙されている。これらの利点は、同時に、旧来の教育制度に対する改革論的提案でもあったことはいうまでもない。かれは、これらの利点を大きく二つに分類しつつ、前者には五つの利点を、後者には十五の利点を列挙している。それは、『実学』教育の利点を強調しようとするものである。以下は、それらの利点についての分析的な紹介である。

I そのような初等教育において修得される学問から得られる利益 (ibid., pp. 19-25)。

- 1 その修得者に応分の社会的尊敬をもたらす。
  - 2 退屈に陥ることがない。すなわち、かれに快樂をもたらさうるものが欠けている時に、かれ自身に満足をもたらさうるものに対する無知から解放される。
  - 3 過度の肉欲とそれによる有害な結果を抑制する。
  - 4 怠惰とそれによって生ずる悪影響を抑制する。
  - 5 良き友人を得て、愉快的交際が可能となる。
- II そのような「クレストマチック・スクール」という形で行なわれる初等教育において修得される学問とそのような知的教育課程から得られる利益 (*ibid.*, pp. 25-37)。
- 1 多くの広範な教科から得られる役に立つ技能と知識を、このような教育制度によって、かつ、若い段階で、修得しうる事が約束される。
  - 2 若い人がもつ能力と意欲を刺激しつつ、その学業と職業を活気づかせる機会を増大させる。
  - 3 このような教育課程において修得する多くの広範な教科から得られる知識によって一般的な精神力が培われる。
  - 4 どのような職務であれ、それぞれの生徒が選択する職務に必要な知的コミュニケーションの能力が培われる。
  - 5 若い人に、その最高目的に対すると同じく、日常的にありふれたさまざまな目的を実現するために役立ちうる整理整頓の習慣を形成する。ここで得られた良き整理整頓の習慣は、その精神的安定の大きな源泉であり、かつ、良き管理の手段となる。

6 さまざまな形の安樂の源泉をもたらし、かつ、さまざまな形の不快を避けうる能力を修得できる。

7 健康と同じく、生命の安全のために役立つ知識を修得できる。生命の安全と健康なくしては、どのような安樂もないであろう。

8 理由なき恐怖、有害な詐欺的行為や自己偽瞞から解放される。

9 生涯を通して気心のしれた友人を得る機会となる。

10 個人で自分の子供を監視する場合に要する労力、不安、時間の損失に比べて両親の負担が軽減される。

11 その得られる価値に比べて、この教育方式は格段に安上がりである。

12 すべての分野で役に立つ二―三の有益な教科が全課程の修了直前において教えられるので、カリキュラム全体の中で省略せざるをえない教科が出て、これを最小限の損失にとどめることができる。

13 体罰が禁止され、体罰がなくなるので、教師たちは残酷であるとか、不法行為を働いているとかの非難から免れる。

14 生徒たちの学力が最初の学力競争において特別に優秀であることが証明され、その結果、このような教育制度が推奨されることになるであろう。

15 それぞれの生徒たちの職業選択の分野を拡大する。

ベンサムは、「クレストマチック・スクール」に学んだ生徒たちが同スクールから得られるさまざまな利益として、以上にみた二〇の利益を列挙している。これらの二〇の諸利益は、かれの主張しようとする教育理念を具現化したものにはかならない。一般的に教育理念といえば、いかにも高邁な理念が想定されるであろうが、かれの教育理念は、『実学』的教育課程への教育改革論のうちに成立すべきものとしてとらえられている。まさに、『実学』こそ、新しい

教育理念たらねばならないのである。そして、かれは、そのような《実学》の教育を旨ざすべき場所として「クレストマチック・スクール」を構想したのである。

十九世紀初頭のイギリスにおいては、エリート教育を別とすれば、一般的な初等教育は皆無に等しかった。そのような状況の中で、ベンサムは初等教育の必要性を強調しつつ、従来のような古典中心のエリート教育ではなく、《実学》中心の教育内容へのカリキュラムの改革の重要性を強調しようとしたのである。

ベンサムが列挙した「クレストマチック・スクール」の二〇の諸利益については、それぞれの利益についての個別的な解説はここでは必要ないと思われる。しかしながら、ここでは、その若干のコメントを加えておきたい。

まず第一は、IとIIとの区別が判然としない点が指摘されるべきであろう。その上、「Iの5」と「IIの9」、および、「Iの2」と「IIの6」は、完全に重複している。それでは、IとIIはどのように区別できるのであるか。その区別は、Iは初等教育一般から得られる利益であり、IIはそのような初等教育が「クレストマチック・スクール」という形で実施された場合に得られる利益であるところにあるように思われる。

Iにおいては、ベンサムは、初等教育を受けた生徒たちは、ながしかの社会的尊敬を得ることができ、その人生において退屈に陥ることなく自己に快樂をもたらすものをつねに追求し、過度の肉欲と怠惰を抑制できるようになるであろうと期待している。その結果として、その生徒たちは、良き友人を得て、愉快的交際の機会を得ることができるようになるのである。

IIにおいて、ベンサムは、初等教育が「クレストマチック・スクール」という形で実施された場合に、特別に得られる利益を指摘している。ここには、さまざまな種類の利益が列挙されている。それらを、ここで、あえて大別するならば、次のように大別できるように思われる。

- ① その他のスクールと比較した場合のクレストマチック・スクールの制度上の有利性(12、13、14)。
- ② その実学教育から得られる実用的な技能と知識(1、2、6、7)。
- ③ その実学教育によって得られる職業的能力(2、4、15)。
- ④ その実学教育によって得られる精神力(3、8)。
- ⑤ それによって得られる良き習慣と友人(5、9)。
- ⑥ そのような教育に要する費用が安上がりであること(10、11)。

以上の十五の諸利益をさらに簡略化して表現するならば、「クレストマチック・スクールで実用的な技能と知識を修得した生徒たちは、その職業選択の機会を拡大させ、それによって得られる自信がその精神力を高め、人生における良き習慣の形式を促す」と約言できるように思われる。これらの諸利益は、まさに、『実学』教育によってもたらされるものである。そのような初等教育の普及の重要性を、ベンサムは、熱情的に主張したのである。そして、かれは、これを、具体的には、次節でみるような『カリキュラム改革』論として展開したのであった。

## 五 「クレストマチック・スクール」のカリキュラム

ベンサムが構想した「クレストマチック・スクール」は、七歳から入学することができ、十四歳にて修了する。同スクールは、いわゆる学年別の編成ではなく、ステージ(発達段階)別の編成で授業が実施される。かれは、第一ステージから第五ステージまでを想定して、それぞれのステージ別に以下にみるような教科を配置している。

ベンサムによれば、第一ステージから第二ステージに進むためには、第一ステージの教科について一応の習得を終

えていなければならない。「それぞれのステージにおいて、生徒はその習得が不完全のまま、次のステージに進むことはできない」(ibid., p. 126.)。同スクールの生徒たちは、各ステージにおいていわば合格点を取らない限り、次のステージに進むことができないのである。これは、ある面では生徒たちに過酷にすぎるといえるであろうが、他面ではそれぞれの教科についての初歩的な知識を確実に習得できるという利点にも通じるであろう。仮に各ステージでの習得が不完全のままに全ステージを機械的に終了したとしても、結局、ほとんどなにも習得することができない場合を想定するならば、同スクールでの教育はほとんどその意味をもちえなくなるからである。そのような場合には、そのような生徒とその両親は、時間と金を無駄使いするだけであるといわざるをえない。ベンサムは、そのような浪費は許されない、と考えていたのである。

ベンサムは、第一ステージから第五ステージまでにカリキュラムを区分しつつ、各ステージに次のような教科を配置している。以下、各ステージにおけるカリキュラムを簡略化しつつ、その要約を紹介することにした(1)(ibid., pp. 63-95.)。

第一ステージ「予備的ステージ」(1)(ibid., pp. 63-6.)。

(1) 「書くこと」(2)(Writing.) クレストマチック・カリキュラムの一番最初の課題として配当される。「書くこと」は、「図画」(Drawing.)の一形式であり、その他の学習の前提条件となる。

(2) 「鉱物学」(Mineralogy.) さまざまな鉱物について、その形状や色を覚え、その他の感覚的に理解できる性質からその鉱物の特徴を覚える。

(3) 「植物学」(Botany.) 鉱物学と同じく、さまざまな植物について、その形状や色を覚え、その他の感覚的に理



解できる性質からその植物の特徴を覚える。

(4) 「動物学」(Zoology) 植物学と同じく、さまざまな動物について、その姿や色を覚え、その他の感覚的に理解できる性質からその動物の特徴を覚える。

(5) 「地理学」(Geography) 地図の説明とそれに必要な用語の説明にとどめる。それは、単純な「地形学」(Topography) でよく、地球上の自然的または人工的な目ぼしい地点の説明でよい。

(6) 「幾何学」(Geometry) 古代のギリシヤ人の間では、幾何学は所有権を確定するための測量に使用された。第一ステージにおける幾何学は、あらゆる種類と大きさの違う物体および空間を計測することを覚える。

(7) 「歴史年代学」(Historical Chronology) 歴史とは過去の出来事に関する知識であり、戦争・征服・政権交代等について、これを年代順に学ぶ。

(8) 「伝記的年代学」(Biographical Chronology) 歴史上の有名な人物の生涯について、年代順に学ぶ。

(9) 「応用図画」(Appropriate Drawing) ここでの図画は、たんに絵を描くことではなく、「描くこと」一般を含む。まず、描写力そのものを高める。しかし、そのためには、描こうとする対象についての知識が必要となる。文字を書くことのみならず、鉱物学・植物学・動物学・幾何学においても「描く」ことは重要である。したがって、「図画の趣旨は、カリキュラムの各ステージにおいて違ってくる」(ibid., p. 66)。

## 第二ステージ (ibid., pp. 66-74.)

(10) 「狭義の機械学」(Mechanics in the limited sense of the word) この教科では、①レバー、②車輪、③滑車、④斜面、⑤スクリュー、⑥くさび、⑦ロープ式マシン、について学ぶ。これらのものは、速度を落として力を得よ

うとするか、力を弱くして速度を得ようとして工夫された機械である。ここで「狭義の機械学」とは、①重力と  
いう引力、②凝集力、③弾力の範囲内にある機械に関する学問である。

- (11) 「流体静力学」(Hydrostatics) 水や液体の構成要素について学ぶ。また、ポンプや水車の力学について学ぶ。  
(12) 「水力学」(Hydraulics) 液体の機械的性質を学ぶ。これは、「流体静力学」の特殊部門であるともいえる。具  
体的には、ポンプや水を通すための手段について学ぶ。

- (13) 「機械的気力学」(Mechanical Pneumatics) 空気やガスの機械的性質について学ぶ。具体的には、空気やガス  
の重量や弾力、および、その圧力について学ぶ。また、風車や帆船の仕組みについて学ぶ。

- (14) 「音響学」(Acoustics) 空気の運動によってつくられる音の性質について学ぶ。

- (15) 「光学」(Optics) 光の性質と視力について学ぶ。また、ガラスやその他の反射体を利用する技術について学  
ぶ。

- (16) 「化学」(Chemistry) 液体や固体を含む混合物の性質について学ぶ。また、そのような混合物が温度によって  
変化することを学ぶ。

- (17) 「無機化学」(Mineral Chemistry) 無機的な混合物の構成要素とその分解について学ぶ。

- (18) 「植物化学」(Vegetable Chemistry) さまざまの植物の分解について学ぶ。

- (19) 「動物化学」(Animal Chemistry) さまざまの動物の分解について学ぶ。

- (20) 「気象学」(Meteorology) 水が、霧や雨、あられやひょう、あるいは雪になることを学ぶ。さらには、雷や  
稲妻について学ぶ。

- (21) 「磁気学」(Magnetism) 引力と反撓力について学ぶ。具体的には、東西南北の方角について学ぶ。

- (22) 「電氣学」(Electricity.) いろいろの物体を引きつけたり、反撓したりする電氣の性質について学ぶ。また、電氣がつくり出す光と熱について学ぶ。
- (23) 「流電氣学」(Galvanism.) さまざまな固体や流体が電氣によって受ける変化について学ぶ。ほとんどの物体が、電氣によって、新しい変化を示す。この教科は、「化学」とも重複する。
- (24) 「弾道学」(Ballistics.) これは、発射体に関する学問であり、その発射体が固体であるか流体であるかを問わない。それが固体である場合には、砲術がこれに含まれる。それが流体である場合には、噴水をつくる技術が含まれる。
- (25) 「地理学Ⅱ」(Geography continued.) 第一ステージの「地理学」につづくもので、各国別の人口・国富・統治者名・位階爵位・軍事力等々について学ぶ。
- (26) 「幾何学Ⅱ」(Geometry continued.) 第一ステージの「幾何学」につづくもの。
- (27) 「歴史年代学Ⅱ」(Historical Chronology continued.) 第一ステージの「歴史年代学」につづくもので、これを復習しつつ、戦争・攻城・併合・領土分割・領土の獲得と喪失・王朝の交代等を含めて歴史上の大戦争や政治的事件を学ぶ。
- (28) 「伝記的年代学Ⅱ」<sup>(3)</sup>(Biographical Chronology continued.)
- (29) 「応用図画Ⅱ」(Appropriate Drawing continued.) 「描く」とは、さまざまな科学と技術の熟達のために不可欠の能力である。この「アプロプリエイト」とは、「さまざまな教科の学習に応用することを目ざそうとするものである」(ibid., p. 74.)。
- (30) 「文法練習」(Grammatical Exercises.) 言語一般の構造について、特にイギリス語の構造について学ぶ。その

上で、ラテン語・ギリシヤ語・フランス語・ドイツ語について学ぶ。イギリス語以外の外国語は、それらが相互に関連している語族であることを中心として学ぶ。外国語は、ラテン語やギリシヤ語の死語を含めて「読む」ことに重点を置く。その「会話」は、学習してもよく、学習しなくてもよい。その教材としては、「歴史」と「伝記」から精選したものを使用する。作文は、イギリス語以外は、自己学習とする。

### 第三ステージ (*ibid.*, pp. 75-9.)。

- (31) 「採鉱」(Mining.) やさまざまな種類の単一の鉱物とそれらを化合してつくられた新しい鉱物について学ぶ。
- (32) 「地球構造学」(Geognosy.) 地球をつくっているさまざまな物質について学ぶ。この教科は、「化学」による研究成果の一つであるともいえる。地理学と地球構造学は、それぞれ別の角度から地球をとらえようとする教科である。また、地球構造学は、価値ある鉱物を発見できるといふ実際的な利益を伴っている。
- (33) 「測量術」(Land-surveying.) 第一・二ステージで学んだ「機械学」や「幾何学」を応用して初歩的な「三角法」を学ぶ。
- (34) 「建築学」(Architecture.) さまざまな建築物を、①独立して使用する目的でつくられる建築物、および、②交通の目的のためにつくられる道路・運河・埠頭・橋等に区別して、それらの模型をみながら、それらの建築方法について学ぶ。
- (35) 「農業」(Husbandry.) ここには、植物学や園芸学を含む。第二ステージで学んだ「植物化学」を応用して、かつ、「建築学」で学んだ知識を活用して、農作物の発芽方法、貯蔵方法、施肥方法、腐敗や酸化の防止方法について学ぶ。園芸学では、野菜の栽培に必要な温度調節やシェルターについて学ぶ。

(36) 「自然経済学」(Physical Economics.) ギリシヤ語の語源から考えるならば、「経済学」とは一家の経営に関する学問である。「自然経済学」は、一家の家族の身体的な安楽を最大化し、その不快を最小限化しようとするところにあり、かつ、そのような目的を実現するための労力と費用を最小限にしようとするところにある。そのためには、具体的には、暖房、冷房、温度、洗濯と乾燥、換気、採光、衣類、料理、保管、修繕、補修等について学ぶ。

(37) 「健康学」<sup>(4)</sup>(Hygiastics or Hygiantics.) 健康の維持と回復について学ぶ。そのためには、薬や下剤についての知識だけでは不十分である。若者の教育においてこのような教科は非常に重要であるが、これまでは一般的には無視されてきた。この教科では、次のような有益な利益をもたらしてくれる健康維持方法について学ぶ。すなわち、病気や死亡から自己を守るために、快適な室内温度や湿度、換気の必要性、食べすぎや働きすぎに対する注意の必要性について学ぶ。

- (38) 「地理学III」<sup>(5)</sup>(Geography continued.)  
 (39) 「幾何学III」(Geometry continued.)  
 (40) 「歴史学III」(History continued.)  
 (41) 「伝記III」(Biography continued.)  
 (42) 「応用図画III」(Appropriate Drawing continued.)  
 (43) 「文法練習II」(Grammatical Exercises, applied above, continued.)

第四ステージ (*ibid.*, pp. 79-80.)

- (44) 「生理学」(Physiology.) 人の身体の各構成部分の働きについて学ぶ。
- (45) 「解剖学」(Anatomy.) 人の身体の各構成部分の内部について学ぶ。
- (46) 「病理学」(Pathology.) 人の身体上の感覚的苦痛について学ぶ。
- (47) 「疾病分類学」(Nosology.) 人がかかりやすい病気や身体的不調にどのようなものがあるかについて学ぶ。
- (48) 「栄養学」(Dietetics.) 人が摂取する食物と飲物、および、その栄養について学ぶ。
- (49) 「薬物学」(Materia Medica.) 薬の成分について学ぶ。
- (50) 「予防学」(Prophylactics.) 病気の予防法について学ぶ。
- (51) 「治療学」(Therapeutics.) 病気の治療法について学ぶ。
- (52) 「外科、または、物理的治療学」(Surgery, or Mechanical Therapeutics.) 外科的手術とその手段について学ぶ。
- (53) 「動物衛生学」(Zoohygiatics, or Zohygiatics.) 動物の健康と病気になった時の治療法について学ぶ。
- (54) 「動物保護学」(Phthisozoics.) 動物をその天敵から保護する方法について学ぶ。そのためには、その動物の天敵を駆除する方法について学ぶ必要がある。
- (55) 「地理学<sup>(6)</sup>IV」(Geography continued.)°
- (56) 「幾何学IV」(Geometry continued.)°
- (57) 「歴史学IV」(History continued.)°
- (58) 「伝記IV」(Biography continued.)°
- (59) 「応用図画IV」(Appropriate Drawing continued.)°

(60) 「文法練習Ⅲ」(Grammatical Exercises continued.)。

第五ステージ (*ibid.*, pp. 80-89.)

(61) 「数学」(Mathematics.)。

(62) 「算数」(Arithmetic.)。

(63) 「代数学」(Algebra.) 幾何学が主として図形を用いるのに対して、算数と代数学は主としてアラビア数字で表わされた数字を用いる。なお、代数学で用いられるさまざまな記号は「速記術」にも応用できる。

(64) 「天体地理学」(Uranological Geography.) 天体の成り立ちとその運動について学ぶ。また、地球の緯度や経度について学ぶ。

(65) 「天体年代学」(Uranological Chronology.) 天体地理学は空間から天体を考えようとしているのに対して、天体年代学は時間から天体を考えようとする教科であり、さまざまな天体の周期・週期・太陽年・月数・太陰年・日数について学ぶ。

(66) 「歴史学Ⅴ」(History continued.)。

(67) 「伝記Ⅴ」(Biography continued.)。

(68) 「応用図画Ⅴ」(Appropriate Drawing continued.)。

(69) 「文法練習Ⅳ」(Grammatical Exercises continued.)。

(70) 「科学技術」(Technology.) 第二ステージと第三ステージで学んだ機械学や化学の知識を、更に、詳細に学ぶ。また、分業が完成速度の点では有利であり、そのような分業によるマニユファクチュアが手工業にとって代

わりつつあることを学ぶ。「クレストマチック・スクール」は、そのような科学技術教育を重視しており、さまざまな職人たちに実践的な教育を与える機会となる。それは、ここに学んだ生徒たちに精神的な活力と独立心を涵養することになるであろう。「ミドリリング・クラスに関する限り、その生徒が習得した科学技術がすばらしいとする価値観が拡がれば拡がるほど、科学技術はますます有用なものとして認識されることになるであろう。そして、天性のものであれ、偶然に形成されたものであれ、かれの鑑識力と向上心が望ましい方向に高まって行けば行くほど、かれはその生計をたてうる領域が拡大してゆくことを知るであろう」(ibid., p. 86.)。

(71) 「簿記一般」(Book-keeping at Large.) この教科においては、さまざまな出来事を記録として残す技術を学ぶ。「正確さ、完全さ、明確さ、簡潔さ、読みやすさ」を心掛ける。「クレストマチック・スクール」では、「そのような技術が完全に実践されている実例を見ることが出来る」(ibid., p. 87.)。同スクールでは、第一ステージから第五ステージまでのそれぞれのステージで、生徒たちはなんらかの形でその学校経営に参加しているので、そのような簿記技術を知らず知らずのうちに習得することになるであろう。

(72) 「商業簿記」(Commercial Book-keeping.) これは、一般に呼ばれているいわゆる「簿記」である。「クレストマチック・スクール」では、常時、金銭に関して、その領収・支出・残高を記録する。

(73) 「筆記術」(Note-taking.) 教科書を使用するか否かにかかわらず、授業内容を要約的に記録する技術であり、作文の一種であるともいえる。正しく要約されているかどうかについての練習を行なう。

以上が、ベンサム「クレストマチック・スクール」のカリキュラムの全体像である。ここでは、まず、このようなカリキュラムの五つの特徴点を指摘することにした。



その第一は、《実学教育》という特徴である。「文法練習」におけるギリシヤ語とラテン語を除くあらゆる科目が、すべて、実用本位の実学である。それらの教科は、いわば、「すぐ役に立つ」ことを目的として教授されるのである。また、すでに第三節でみたように、このカリキュラムからは、宗教教育が一切排除されている。

その第二は、日本流に言えば、「読み・書き・そろばん」が基調となっており、これに加えて、歴史と歴史上の人物伝・理科・語学・保健医学に関する教科によって構成されている。特に、自然科学上の知識が重要視されており、これは次にみる「職業教育」の基礎ともなっており、ゆくものである。

その第三は、「職業教育」という特徴である。第五ステージの「科学技術」においては、いわゆる職人的な仕事を含めて、初歩的な職業教育が行なわれる。「クレストマチック・スクール」は、いわゆる職業訓練校ではないが、実学を習得しつつ、さまざまな職業に関する情報と知識を習得しうるカリキュラムを編成しようとしているのである。

第四の特徴として、次の六教科がカリキュラムの各ステージにおいて常設されていることが指摘できる。すなわち、それらの教科は、①地理学、②幾何学、③歴史学、④伝記、⑤応用図画、⑥文法練習、である。これらの教科については、生徒たちは、「クレストマチック・スクール」に在学中は、常時、そのステージに応じた学習を継続してゆくのである。

第五の特徴は、そのカリキュラムからは、主として教室不足という理由によって、次の教科が割愛されているところにある。①体育実技（ダンシング、乗馬、フェンシング、軍事教練）、②芸術（音楽、絵を描くこと、彫刻、版画）、③機械学と化学の応用としての軍事技術（砲術、築城術、航海術、軍事作戦）、④純文学（文学としての作文、詩作、修辞学、批評）、⑤道徳科学（神学、個人的倫理学、国内法、国際法、文法論、政治経済学）、⑥論理学または形而上学。なお、

これらの割愛される教科については「テーブルI」に記載されてはいるけれども、『クレストマチア』の本文中にはその詳細な説明はない。

本節をしめくくるに当り、以上のようなカリキュラムの問題点を、次の三点に限り、ここに指摘しておきたい。その第一の問題点は、ベンサムが列挙した多くの教科の名称があまりにも硬直した専門的にすぎる名称である点である。その目的と内容は、生徒たちにとってはあくまでも初歩的な知識の習得にある。しかし、それらの教科があまりにもいかめしい名称を付けられているために、ほとんどの生徒たちは当惑せざるをえないであろう。これらの教科の名称は、もっと、親しみやすい名称に改める必要があるように思われるのである。

第二の問題点は、このカリキュラム上における教科数があまりにも多すぎるといふ点である。いくつかの教科は相互にオーバーラップしているので、そのような教科は総合できるはずである。ベンサムは、初等教育のカリキュラムをあまりにも細分化することによって、その全体像をみえにくくしてしまった、といわざるをえないのである。

第三の問題点は、教科書に関する点である。これだけ多く教科について、教科書を全く使用することなくそのカリキュラムを円滑に教授してゆくことは不可能であろう。それぞれの教科についての教科書の作製とその費用負担については、ベンサムはなにも述べていない。このようなカリキュラムを前提とする限り、かれは、差し当りは「クレストマチック・スクール」での教科書は望むべくもない、と考えていたのかもしれない。同スクールでは、教科書は教師たちの手製によって出発しなければならない、といわざるをえないように思われるのである。しかしながら、その費用はかなりの金額となるであろう。ここに、「安上がりの教育」を目ざした「クレストマチック・スクール」の隘路があることを指摘せざるをえないのである。

## 注

- (1) 以下、各ステージのカリキュラムに付した番号は、原著によるものではなく、著者が便宜的に付した仮の整理番号である。また、各教科についての説明は、原著からの要約的な紹介である。
- (2) 『クレストマチア』の「テーブルI」には、「書くこと」という教科は記載されていない。しかし、同書の本文中から「書くこと」が学習の基礎的な訓練とされていると解釈されるので、本稿では、あえてこれを第一ステージの教科として扱うことにした。
- (3) この教科については、『クレストマチア』の本文中にはその言及がない。しかし、同書の「テーブルI」には、この教科が記載されている。
- (4) この教科については、「テーブルI」には記載がない。
- (5) (38) 「地理学III」から(43) 「文法練習II」までは、「テーブルI」に記載があるのみで、『クレストマチア』の本文中にはなんらの説明もない。
- (6) (55) 「地理学IV」から(60) 「文法練習III」までは、「テーブルI」に記載があるのみで、『クレストマチア』の本文中にはなんらの説明もない。
- (7) (66) 「歴史学V」から(69) 「文法練習IV」までは、「テーブルI」に記載があるのみで、『クレストマチア』の本文中にはなんらの説明もない。

## 六 「クレストマチック・スクール」の学校運営原理

ベンサム『クレストマチア』の本文の最終部分は、「テーブルIIへの注解」(Notes to Table II.)に当てられている。しかし、それは、わずか二二頁にすぎない。これを逆にいえば、「テーブルII」には膨大な項目が提示されているにもかかわらず、その本文中での説明はほとんど省略されているといわざるをえないであろう。その限りでは、ベンサ

ム『クレストマチア』は、未完成の教育論であるといわざるをえない。同書は、未完の大著に終わったといわざるをえないのである。

「テーブルIIへの注解」は、第一部と第二部に分けられている。その第二部「学校運営への諸原理」(ibid., pp. 101-118.)においては、「クレストマチック・スクール」のさまざまな運営原理として四三の原理が列挙されている。これらの諸原理を通して、ベンサムが構想した同スクールの全体像が浮かび上がってくるので、ここにそれらのすべてを紹介したい。それらの諸原理を直訳しても意味不明のものが多くなるので、ここではその意味を斟酌したかなりの意識によって紹介することにした。なお、以下に紹介する諸原理のうちのいくつかは、前節までに紹介した部分と重複していることをお断わりしたい。

(1) 「助教師制原理」(Scholar-Teacher Principle) 最も熟達した生徒たちの中から選ばれた生徒を助教師役として採用し、他の生徒たちへの授業を担当させる。教師の人件費を節約するという視点から、そのような助教師は可能な限り最大限に採用する。

(2) 「助教師の学力増進が期待できる制度」(Contiguous proficiency principle) 助教師は、教師にかわって生徒を教えることによってその学力を一層高め、正教師の実力に接近してゆくことが期待できる。

(3) 「同級生がチューターを務める制度」(Scholar-Tutor principle) 助教師制は助教師がクラスの生徒全員に対して授業を受け持ち試験を実施したりするのに対して、同級生がチューターを務めるこの制度は、他の同級生たちの学習を個別的に学力に応じてかれよりも遅れている別の生徒の学習を個別的に援助させる制度である。

(4) 「生徒を監視人として採用する制度」(Scholar-Monitor principle) 「クレストマチック・スクール」の校舎は、パノプチコン様式で建築される。これはほぼ円型をした建築様式で、その中心部に監視所が置かれ、校長は

随時そこから各教室を監視することができる。これに加えて、学校の秩序保持のために、生徒を校長の補助役としての監視人として採用する。

(5) 「校長の時間節約を実現すべき原理」(Master's Time-saving principle) 校長は一人であり、その職務は、随時、生徒の監視や生徒の指導に当たることである。それ以外の雑務に校長が忙殺されるようなことがあってはならない。そこで、生徒の中からクラス運営委員を選び、かれらに学校の雑務を分担させる。

(6) 「父母の定期的参観を実施すべき原理」(Regular Visitation principle) この原理は一種の法廷的な役割を果たすもので、これまでの一般の学校においても実施されてきた制度である。しかし、「クレストマチック・スクール」では、このような父母参観制度はより一層充実したものになるであろう。なぜならば、同スクールは、父母の醵金によって運営されるからである。

(7) 「懲罰の最小限化原理」(Punishment minimizing principle) この原理には、体罰を禁止する原理が含まれる。

(8) 「褒賞を多用しない原理」(Reward economizing principle) 褒賞はそのための費用を要するのみならず、褒賞を受けない生徒たちに苦痛を与えるので、褒賞は最小限にとどめる。

(9) 「生徒の動きを常時点検する原理」(Inspection principle)<sup>(1)</sup> これは、パノプチコンの建築様式によって確保される。これによって、校長は、生徒から見えないようにつくられた円形の校舎の中心部から、随時、すべての教室における生徒たちの動きを点検することができる。

(10) 「科目別にその成績順によって着席順を決めるべき原理」(Place-capturing principle) これは、各科目別に、その成績順に教室内の着席を変えるべきであるとする制度である。また、その科目の成績が下がった生徒

は、その成績に応じて席順を下げられる。

(11) 「クラス運営委員が他の生徒たちの成績評価を提出すべき原理」(Appeal providing principle.) クラス運営委員たちは、①助教、②チューター、③監視人のいずれかを兼ねている。かれらは、前記(10)の制度を円滑に実施するために、その生徒たちの成績評価を行ない、これを正教師に提出しなければならない。

(12) 「生徒による陪審制」(Scholar Jury principle.) この陪審制の対象には、校長や正教師の不公平や横暴をも含む。しかし、この制度の基本的な目的は、生徒たちに、問題のある生徒の懲罰を決定するという自主的な決定権を保障しようとするところにある。

(13) 「生徒別の総合的な成績評価を記録すべき制度」(Progress Resistration principle.) 生徒各人の総合的な成績評価を記録する。そのために、生徒の中から成績評価記録係を採用する。

(14) 「学力の増進度を記録すべき制度」(Comparative Proficiency principle.) 前記(10)「科目別にその成績順によって着席順を決めるべき原理」の結果にもとづいて、生徒各人別に、その学力増進度を評価して、これを記録する。各生徒の総合的な成績評価は数値で示す。その数値の小さい方が優秀度が高いものとする。

(15) 「生徒の非行を記録すべき制度」(Delinquency Registration principle.) 生徒の非行を記録するための「えんま帳」を作成する。

(16) 「生徒の怠慢を成績評価記録係が告知すべき義務」(Delation exacting principle.) (13)でみたような役割をもつ成績評価記録係は、各生徒の学習上の成果と怠慢との「差引残高表」を作成・記録して、これを校長に告知しなければならない。これは、たんなる怠慢や悪ふざけやいたずらが犯罪扱いとされないためにも必要である。

(17) 「学力増進が約束される教育制度を目ざすべき原理」(Proficiency promising principle.) この学校制度では、

学力増進のためのあらゆる方策が実施されているで、所期の学力増進が十分に得られるものと期待されており、父母の要求にも充分に応えうるものとなるであろう。

(18) 「生徒の学習理解力に対する予断を排除すべき制度」(Non-conception presuming principle) 教師は、その授業内容を繰り返し教授して、生徒たちの理解力を高める。性急な試験は、これを避ける。

(19) 「生徒に学習の完全な達成度をもたらすべき義務」(Perfect Performance exacting principle.) のちにみる  
 (31) 「授業時間は一時間以内とする原理」、および、(30) 「習熟度別にクラス編成をすべき原理」等のカリキュラム上の工夫によって、一定の学習期間内に、生徒たちがその授業を完全に理解できるような教育制度を目ざす。

(20) 「学習内容を漸進的に高めてゆくカリキュラムを組むべき原理」(Gradual Progression principle.) 授業内容の難易度を、生徒がそれと気付かない程度に、ゆるやかに高めてゆく。各生徒の学力向上について学力向上記録係がこれを記録して、父母や校長に報告する。

(21) 「生徒に再学習の機会を十分に保障すべき原理」(Adequate Recapitulation principle.) 以前に学習した内容を忘れてしまっている生徒に対して、その程度に応じた再学習の機会を与える。

(22) 「成績順に随時教室内の着席順を決め、学習効果を最大化すべき原理」(Place-capturing probative Exercise maximizing principle.) 多くの高等学校ではこのような制度は実施されていないが、「クレストマチック・スクール」ではこの制度は最大化される。

(23) 「筆記による学力と口頭発表による学力が最大限に一致するような教育方法を実施すべき原理」(Literal Conformity maximizing principle.) 口頭発表によって示される学力が筆記によって示される学力と最大限に一致する

ことが望ましい。多くの生徒がこれを達成するならば、かれらを助教師として採用する機会が拡大するという利点もある。

(24) 「系統的な思考力をテストする原理」(Organic Intellection Test principle) 前記(23)の教育方法とも関連して、この制度を最大化してゆくことはきわめて重要である。これは、さまざまな学問の目的の相互関連性を生徒に理解させることを主眼としたものである。

(25) 「ノートを取らせるべき原理」(Note-taking principle) これは、「書くこと」の練習を積み重ねるという目的に加えて、時には「きれいさ」を犠牲にしても「手早さ」を重視して書き方を学ぶことを主眼としたものである。これは、即席的な作文であるともいえる。

(26) 「セルフ・サービスの原理」(Self-service principle) これは、授業を受ける前に生徒がその準備作業を自ら行なうべきであるとする原理である。例えば、ペンを修理するとか、紙に罫を引くとか、鉛筆を削るといった準備作業である。これらの準備作業は、一般の学校では教師が行なっている場合が多い。

(27) 「授業予定を明記して、これを公表すべき原理」(Task Description principle) これは、前記(26)の応用版である。これは、現在進行中の授業科目の直前に行なわれた科目とその次に行なわれる科目を明記して、これをクラスの全員に知らせるべきであるとする制度である。

(28) 「さまざまな図表を教室内や廊下の壁に掲示して学習に役立てるべき原理」(Tabular Exhibition principle) 生徒の眼にふれる学校内のあらゆる場所を利用して、教育上役立つさまざまな図表を張り出す。例えば、低学年のクラスでは、伝記上の人物の年表、歴史年表、地図、生物や動物の進化を示す図表等が考えられる。

(29) 「集中力が散漫にならないようにこれを予防すべき原理」(Distraction preventing principle) 生徒が授業中に



集中力をそがれることがないように、採光上の問題がない限り、窓を高くして、教室外のさまざまな動きが生徒の眼に入らないように校舎建築上の工夫を施す。

(30) 「習熟度別にクラス編成をすべき原理」<sup>(3)</sup> (Apposite Classification Principle) 科目別に生徒の習熟度に応じてクラス編成を行なう。したがって、生徒は、科目別に、多くのクラスに同時に所属することになる。従来の一一般の学校ではクラス数が限定されていたために、習熟度が高いクラスから低いクラスへの移動はたいへんな恥辱であると考えられ、時にはたいへんな懲罰であると考えられていた。「クレストマチック・スクール」では、科目別・習熟度別にクラスが編成されるので、生徒のクラスへの帰属意識が弱くなり、かつ、(10)「科目別にその成績順によって着席順を決めるべき原理」と併用することによって、そのようなことは避けられるであろう。

(31) 「授業時間は一時間以内とすべき原理」 (Short Lesson principle) 最も遅れた生徒の進度をクラス全員の進度とする。そのためには、一回の学習内容の分量を多くしてはならない。一回の学習内容の分量を少なくすれば、一回の授業時間を短かくすることができる。それによって余分な時間を節約することができるであろう。

(32) 「授業中はクラスの全員が学習に集中すべき原理」 (Simultaneous Action principle) ある生徒が朗読する場合、残りの全員がそれを傾聴することとし、個別的な学習は許されない。これは、クラス全員が一致して学習に集中すべきであるとする原理である。

(33) 「自己学習の自由を保障すべき原理」 (Uninterrupted Action principle) 生徒は、学校に在学中は、正規の授業時間を除いては、各人が必要と考える自己学習の自由を保障される。

(34) 「生徒に号令によって指示を与えるべき原理」 (Word of Command principle) これは、口頭によって生徒に指示を与えることを簡略化した形で利用しようとする原理である。

- (35) 「視覚に訴えるべきさまざまな合図を活用して生徒に指示を与えるべき原理」(Visible Signal principle.)  
これは、教室内の雑音を防止するために工夫されるべきものであり、眼で確認できるさまざまな合図によって生徒に指示を与えるべきであるとする制度である。これは、前記(34)の補助的方法として活用する。
- (36) 「授業内容の不必要な反復を禁止すべき原理」(Needless Repetition prohibiting principle.) これは、前記(21)「生徒に再学習の機会を十分に保障すべき原理」と矛盾するが、この制度の行き過ぎをチェックしようとする原理である。
- (37) 「韻律を利用する暗記方法を活用すべき原理」(Memorier Metre principle.) これは、理論的にも経験的にもその有効性が確認されている。これは、語学教育だけに限定されるべきではない。語学以外の科目の学習にも活用されるべきである。
- (38) 「助教師たちはその職務を相互にやりくりして、その余暇を楽しむべき原理」(Employment varying principle.) これは、助教師たちは、自己の学習に加えて、その他の生徒たちを教えるという職務があるけれども、自己の余暇を楽しみうる自由が保障されるべきであるとする制度である。
- (39) 「生徒がそれぞれ自己の考えをはっきりと回答すべき原理」(Distinct Intonation principle.)
- (40) 「生徒がそれぞれ自己の考えをはっきりとした発音で回答すべき原理」(Syllabic Lecture principle.)
- (41) 「生徒が何回も同じ文章を読み直すことを禁ずる原理」(Unreiterated Spelling principle.)
- (42) 「生徒が同一の問題について回答する際に、何回も言い直すことを禁ずる原理」(Stammering-Repitition prohibiting principle.)
- (43) 「砂地に書いて練習すべき原理」(Psammographic.) これは、砂地に文字や絵を書いて練習することを生徒

に奨励すべき原理である。これは、紙を使わないので安上がりであるのみならず、砂地はどこにもあるのでどこでも利用できるという利点がある。

以上にみたようなベンサムの「クレストマチック・スクール」の学校運営原理は、非常に多岐にわたっている。しかも、それらの諸原理についてのかれ自身の説明もきわめて断片的である場合が多く、ここでそれらのすべての原理について論及することは不可能であるといわざるをえない。以下においては、それらの諸原理について、その若干の意義を考察するにとどめたい。

その第一点は、「助教師制」にある。ベンサムの「クレストマチック・スクール」では、正規の教師の人数は最小限にしばりつつ、学校運営のさまざまなレベルにおいて、そこに学ぶ生徒たちが自主的にこれを分担する、いわば、全員参加方式ともいべき方式が構想されている。この学校では、生徒たちは、助教師やチューターとして採用される他に、校長の補助役・成績評価記録係・学力増進度記録係・怠慢告知義務等の学校内のさまざまな職務を分担する。生徒たちは、学校でたんに勉強するのみならず、学校の管理運営にも参加する。学校の管理運営への生徒たちの参加なくしては、この学校の円滑な運営はありえないものとされている。また、かれらはすべて無報酬でこれらの役割を分担するので、これによって安上りの学校経営が実現できるのである。

その第二点は、「クレストマチック・スクール」では、生徒たちのいわば自治権が大巾に認められていることである。この意味では、(12)の陪審制のもつ意義の重要性が確認されるべきであろう。この陪審制は、生徒が生徒を裁くのみならず、場合によっては、校長や正教師たちの不公平や横暴をも裁くことができる。ベンサムに対してはかれの上からの管理強化思想が批判される場合があるけれども、このような生徒による陪審制はそのようなベンサム批判に対する反証となるであろう。

その第三点は、「クレストマチック・スクール」の校舎は、すべて、ほぼ円形をした建築構造をもつパノプチコン様式で建設されるべきであるとされているところにある。それは、ほぼ円形をした建築構造の中心部に監視所があって、各教室の生徒たちの学習状況を校長を中心とするきわめて少数の管理者によって能率よく監視・監督しようとする意図にもとづいている。これをもって、かれの学校制度を暗い監視装置による生徒たちに対する抑圧装置であると批判することは、かれの意図を曲解する解釈であるといわざるをえない。なぜならば、かれは、生徒たちの能率的な学習効果の達成を、かなりの寛容度をもって、実現しうる初等教育制度を確立すべきであることを提案しているからである。かれのパノプチコン制度は、例えば、ミシエル・フォーコーが主張している監視<sup>4</sup>抑圧制度とは違って、そのような円形の建築様式によって、そこに生活する人々を能率的に監視しつつ、そこに生起するさまざまな問題に即時に対応しようとする意図にもとづいたものであったことを忘れてはならないのである。

その第四点は、「クレストマチック・スクール」では、一切の体罰が禁止されているのみならず、懲罰を用いた教育方法が基本的に否定されていることである。学力の増進度が遅い生徒たちに対してムチ打ち懲罰が当然視されていた当時の学校教育の中であって、ベンサムはこれを断固として拒否したのであった。同時に、褒賞を多用する教育方法を、かれは戒めている。

その第五点は、「クレストマチック・スクール」の第一ステージから第五ステージまでの各ステージにおいて、科目別・能力別クラス編成が行なわれるところにある。これに加えて、各クラスにおいては、そのクラス内での成績順に着席を決める方式がとられる。同スクール全体の生徒総数にもよるが、これはたいへんな数のクラスを必要とすることを意味するし、そのクラス内での学力別着席順を決めることはたいへんな時間と労力を必要とするであらう。これらの作業は生徒たち自らが行なうものと想定されているものの、このような学力別クラス編成と学力別着席順は

実際には不可能であるといわざるをえないであろう。

その第六点は、前述した第五点にもかかわらず、ベンサムの初等教育論はいわばボトム・アップ方式であって、そのクラス内で一番遅れている生徒の学力増進を主眼とした授業が要求されていることである。そのために、カリキュラム上において、また、授業方法上において、さまざまな工夫が提案されている。(17)、(18)、(19)、(20)、(21)、(31)は、そのような代表的な工夫であるといえよう。これらに加えて、(23)、(24)、(25)、(27)、(28)、(29)、(32)、(36)、(39)、(40)、(41)、(42)を列挙することができよう。ベンサムの初等教育論は、クラスの全員が全体としてその学力を増進してゆくところにその主眼が置かれているのである。

その第七点は、クラスの全員が一致して規律ある行動をとるべきことが強調されているところにある。「クレストマチック・スクール」では無気力でダラダラとした学校生活と学習態度は許されない。そのために、号令による指示や合図を利用した指示が必要に応じて活用される。

以上七点にわたり、ベンサムが構想した「クレストマチック・スクール」の学校運営に関する諸原理の意義について考察してきた。本節の最後に、それでは、かれのこのような初等教育論の実現可能性はあるのであろうか、という視点から、その問題点を二つだけ指摘しておきたい。

その第一の問題は、「クレストマチック・スクール」を新たに計画し、これを設立する場合には、現実問題として、多額の資金を必要とする点である。同スクールを設立する場合には、まず、校地の取得費用と円形校舎の建築費が必要であり、その上、教室内の机・椅子等の設備のための費用が必要である。同スクールは、生徒の父母たちの「醸金」によって建築され、運営される原則となっている。しかし、その創立のためには、父母たちの負担は相当なものとならざるをえないであろう。同スクールは、むしろ、発足当初に必要な多額の資金をどのようにして調達しうるの

かというきわめて困難にして現実的な課題の解決なくしてはその創立は不可能であるといわざるをえないであろう。事実、ジュームズ・ミルは、この点に関して、次のように述べているのである。「力量あるどの批評家もこの案の実行可能性についてだれ一人疑問をはさんだものはいなかった。すべての人に望ましい知性がどれだけ多くすべての人にコミュニケーションしうるものなのか、これが実験によって証明されてこなかった唯一の理由は、資金を集めることがむずかしかったということだけである」<sup>(5)</sup>。

その第二の問題は、同スクールが発足するためには、一定数の正規の教員を採用しなければならぬ。また、その待遇も難しい問題である。ベンサムは、『クレストマチャ』においては、教員の採用人数・採用方法・その待遇については具体的にはなにも述べていない。これは、結局、同スクールに入学を希望する生徒の人数にもとづく他はないであろう。その入学希望者数が少なくなればなるほど、同スクールの創立それ自体が不可能になるのみならず、教員の採用や待遇にも大きな影響を及ぼすことになる。ここに、いわゆる私立学校を創立する場合の大きな壁が立ちほだかっているのである。

結局、「クレストマチック・スクール」は、ベンサムの存命中はもとより、かれの他界後も、イギリスでは一校も創立されることはなかった。<sup>(6)</sup> ベンサムを中心とするいわゆる哲学的急進派のメンバーは、その創立に情熱を傾注したけれども、それは失敗に終わったのである。一八二八年に創立されたユニバーシティ・カレッジは、それが高等教育を目ざしたものであったことを別としても、「クレストマチック・スクール」とは異なるものであった。<sup>(7)</sup>

しかしながら、ベンサムの「クレストマチック・スクール」構想は、やがては、イギリスにおける公教育の要求として展開をみる。かれは、イギリスにおける公教育への萌芽形態を理論的に用意したといえるのである。

## 注

- (1) これは、(4)「生徒を監視人として採用する制度」と重複している。
- (2) これは、(10)「科目別にその成績順によって着席順を決めるべき原理」と重複している。
- (3) これは、(10)および(22)「成績順に随時教室内の着席順を決め、学習効果を最大化すべき原理」と重複している。
- (4) Foucault, M., *Surveiller et Punir—Naissance de la Prison*, 1975. 邦訳『監獄の誕生—監視と処罰—』(田村俣訳、一九七七年)、一九八—二二八頁参照。
- (5) Mill, James, *Essay on Education*, 1818. 邦訳『教育論・政府論』(小川晃一訳、一九八三年)、九八—九頁。
- (6) *Chrestomathia, Editorial Introduction*, CW., p. xvii.
- (7) *ibid.*, p. xix.

## 七 啓蒙主義から教育主義へ——むすびにかえて——

《十八世紀啓蒙主義》という用語は、近代ヨーロッパ政治思想史上においては、最も一般的な用語として知られている。啓蒙主義の思想家たちの間には、さまざまな思想的バイアスがあるけれども、人間性に対するオプチミズムがその共通項として抽出できるであろう。そのような人間性＝オプチミズムに先鞭をつけた思想家は、ジョン・ロックであった。ロックは、『教育に関する考察』において人性＝白紙説を展開した。そのようなオプチミスチックな人間性観なくしては、そもそも、教育論は成立しうる余地はなかったというべきであろう。ロックの人性＝白紙説は、教育によって人の善性と能力はいかようにもつくられることを強調しようとしたものである。このような教育観は、フランスではエルベシウスに継承された。かれは、『精神論』(一七五八年)と『人間論』(一七七二年)において教育＝万能論を展開し、これを立法論の課題へと結合する。エルベシウスにおいては、教育論は立法論として展開された

のである。<sup>(1)</sup>

ベンサムは、そのようなエルベシウスの教育論としての立法論を継承して、立法による社会改革によって良き社会と善き人性の実現を目ざそうとしたのである。しかし、かれは、その教育論を立法論に収斂させてしまったわけではない。かれは、立法論を土台としつつも、固有にして具体的な教育論を展開した点でエルベシウスとは基本的に違っている。ベンサム『クレストマチア』は、そのような固有にして具体的な教育論として成立をみたものである。それは、前節までにみたような学校教育論であり、そこにはカリキュラムの新しい構想と具体的な授業方法と学校管理方法が明確な形で提示されているのである。それは、当時の教育制度に対する根柢的な批判であり、それに代わるべき新しい教育改革論にはほかならなかった。

十八世紀啓蒙主義は、ベンサムにおいて明確に《教育主義》として具体化されたというべきであろう。そこでは、人性の改善と能力の陶冶は、啓蒙主義という哲学の分野から教育論における学校制度の課題として把握されているのである。ベンサムにおいては、教育は哲学から制度の問題へと変換されたのである。

ルソーが十八世紀啓蒙主義の範疇に属するか否かはポレミッシュな問題であろう。J・S・ミルは、『自由論』の中で、十八世紀の教育あるほとんどすべての人々が近代の科学、文学、哲学の驚異に感嘆していた時に、「ルソーの逆説が爆弾さながらに炸裂した」と述べている。<sup>(2)</sup>ルソーの性善説からは、《啓蒙》主義が成立しうる余地はないように思われるのである。エルベシウス対ルソーの教育論争は、人工的教育論対自然教育論の対立であった。<sup>(3)</sup>前者の人工的教育論をベンサムは『クレストマチア』において初等教育の学校制度論として具体化した。これに対して、ルソー『エミール』にはそもそも学校という概念が成立する余地はない。ルソーによれば、学校教育は画一的な無個性教育であって、幼児の自然的な善性を圧殺するもの以外ではない。かれの自然教育論が例えどのように理想的なものであ



ったとしても、多くの児童に一定水準の知的教育を与えようとする場合には、そのような理想論的な自然教育では全く対応できないといわざるをえないのである。ルソーからすれば、学校教育制度は子供の自然的な善性を圧殺するものであって、これを回避しなければ人間はその成長に伴って道徳的に墮落してゆくだけである。しかし、ベンサムからするならば、多くの子供たちに初等教育の機会を拡大し、かれらの知的水準をボトム・アップすることによってのみ社会の進歩が確保されうるのである。

ベンサムは、『クレストマチア』においては、ルソーの教育論には一切言及していない。ベンサムからするならば、ルソーの直接民主主義を含めてその自然教育論はあまりにも非現実的なものであった。かれの急進的な改革主義は、当時のイギリスにおいてはなおも一種の理想論ではあったけれども、かれは、これを現実主義的な実現可能な改革論として構想したのである。その限りでは、かれの周辺に結集してきたいわゆる哲学的急進派のメンバーたちは、いずれも、ある種の理想論を主張しながらも、かなりの現実主義的な感覚をもった改革論者であったといえるのである。

ジェームズ・ミルは、『教育論』において、エルベシウスの教育論を高く評価しつつ、「教育は万能ではないとしても、教育によってなしえないことはほとんどない」と述べている<sup>(4)</sup>。ベンサムとミルは、このような教育＝万能論にもとづいて、これを学校教育の制度論として展開したのである。ミルは、一八一二年、『フィラントロピスト』誌に匿名で発表した論文<sup>(5)</sup>を、同年に、単行本として『すべてのものための学校』<sup>(6)</sup>として公刊した。同書は、ランカスター氏の新しい教育方式を批判したハーバート・マーシュ博士を反批判しつつ、ランカスター氏を擁護しようとする意図のもとに書かれたものであるが、宗教教育を繰り返して強く否定しようとしたところこそその最大の眼目があった。これらの二点に関して、ベンサム『クレストマチア』が大きく触発されたことは言を俟たないといふべきであろう。そして、ベンサム『クレストマチア』とミル『すべてのものための学校』および『教育論』の三つの著作は、その後

の哲学的急進派の学校設立運動への基本的なプログラムとなっていたのである。

## 注

- (1) 拙著『増訂 イギリス功利主義の政治思想』、前出、二五—六頁。
- (2) Mill, J. S., *On Liberty*, 1859. 邦訳『自由論』(早坂忠訳)、『世界の名著38』(一九六七年)所収、二六九頁。
- (3) 拙著『増訂 イギリス功利主義の政治思想』、三八—九頁。
- (4) Mill, J., *op. cit.*: 邦訳、前出、五四頁。
- (5) Burston, W. H., *James Mill on Philosophy and Education*, 1973, p. 76 n. cf. Bain, A., *James Mill, A Biography*, 1882, rep. 1966, p. 117.
- (6) Mill, James, *Schools for All*, 1812, rep. 1995.

(一九九五年一二月七日脱稿)